経営情報研究
第22巻第1号（2014年9月），33－45ページ

研究論文

経営倫理学と事実／価値二分法の問題

―ジョン・デューイの価値理論を拠り所にして―

岩　田　　浩

The Fact/Value Dichotomy as a Subject of Business Ethics: Based on John Dewey's Value Theory

Hiroshi IWATA

【要　約】本稿では、既存の経営倫理学の研究アプローチに見られる「規範的なもの」と「経験的なもの」との分離を、かねてより哲学と科学の間に存在してきた「事実／価値二分法」の問題と捉え返し、その二分法に抗して自らの価値理論を展開したデューイの所論に一瞥を加える。そして、そこで得られた方法的示唆を拠り所に、最初に提起した経営倫理学研究の二元論の問題にデューイの見解がどのような積極的意義を提供しうるのか、理論的に考察する。

キーワード：事実／価値、規範的／経験的、価値評価、価値探究

Ⅰ　序言
――規範的か経験的か：2つの経営倫理学？――

かつて、リンダ･K. トレヴィノとゲーリー･R. ウィーヴァーは、経営倫理学の研究アプローチは､「規範的なもの（the normative）」と「経験的なもの（the empirical）」とに二分されている、と指摘した[1)]。ここで言われる、規範的経営倫理学とは一般に指図主義的（prescriptive）立場を取るのに対して、経験的経営倫理学は説明的、記述的、あるいは予言的立場を取る。また、前者は哲学者や神学者の領域であるのに対し、後者はビジネス・コンサルタントや経営大学院の教員の領域であると考えられる。概して、これら異なる領域を代表する学者達は、以下のような異なった理論や仮説に導かれる傾向にある。

まず哲学やリベラル・アーツに根ざした規範的アプローチは、経営は「どうあるべきか」という問題、さらには個人や経営が倫理的になるには「いかに行動すべきか」という問題に関心を向ける。これに対し、経営学や社会科学に根ざした経験的アプローチは概して、組織社会が基本的に客観的であり、「向こうの側（out there）」で公平な探査や発見を待ち受けていると仮定したうえで、経営は「どうなっているか」という問題に関心をもつ。つまり、経験主義者は、社会科学的訓練の合意された方法論を駆使しながら、自然界における現象を記述し、説明し、あるいは予言しようと試みることによって、その問題に応答しようとするのである。

このように、異なる理論的背景をもつがゆえに、これら2つの陣営は互いの努力に対する評価をしばしば誤解する傾向にある。例えば、社会科学者は哲学者の道徳的判断を、経験的観点では理解できないし、また経験的テストによって検証することもできないことから、過小評価するかもしれない。他方、社会科学者の道徳性に関する言明は、哲学者の目には、正誤に関する本質的な問題に取り組んでいないから、さほど価値があるようには映らないかもしれない。ここに､財界におけるある諸慣行の妥当性を評価しうる諸基準を展開する規範的アプローチ（規範倫理学の諸理論）と、個人的ならびに組織的な倫理的行動に影響を与える個人的精神や社会的脈絡の中の定義可能かつ測定可能な諸要因の識別に焦点を当てる経験的アプローチとのコントラストが鮮明になる。このように、経営倫理学の規範的アプローチと経験的アプローチとの間には、研究方法をめぐる埋め難い深い溝が存在するのである（図表1）。もちろん、これら2つのアプローチの融合をめざした試みは、これまで幾つかなされてきた[2)]。だが、それらはい

[1)] Trevino, L. K., and G. R. Weaver, “Business ETHICS/BUSINESS ethics: One Field or Two?,” *Business Ethics Quarterly*, Vol.4, No.2, 1994, pp.113-128.

[2)] 例えば、ウィーヴァー＝トレヴィノは、両者の関係性をめぐり以下の3つの概念を素描した。第1の概念は「パラレル」と呼ばれるもので、概念的・実践的理由から規範的研究と経験的研究とを結合する努力を一切受けつけない。「共生的関係」と呼ばれる第2の概念は、アジェンダの設定や研究結果を応用するときの手引きとして2つの領域は互いに依存し合うかもしれないという実践的関係性を支持する。第3の「十分に発達した理論的統合」と呼ばれる概念――それはほとんど現存しないが――は、理論・仮説・方法論の変更や組み合わせを含め、これら2つの研究のより深い融合を奨励する（Weaver, G. R., and L. K. Trevino, “Normative and Empirical Business Ethics,” *Business Ethics Quarterly*, Vol.4, No.2, 1994, pp.129-141.）。また、バート・ビクター＝キャロル・W. スティーブンズは、両者の統一を要求しつつ、経営状況における道徳的行動の記述的側面を無視することは非現実的な哲学の危険にさらされることになり、規範的側面を無視することは道徳観念のない社会科学の危険にさらされることになる、と論じる（Victor, B., and C. U. Stephens, “Business Ethics: A

ずれも、この対立問題を克服するための決め手とはならなかった。

カテゴリー	規範的アプローチ	経験的アプローチ
(1) 基なす学問	哲学、神学、リベラル・アーツ	マネジメント、社会科学
(2) 言語 倫理的行動・行為の定義	評価的 正しい、正当な、公平なことに基づく行為	記述的 倫理的選択、(正誤に関する) 決定
(3) 人間の道徳的行為に内在する仮説	自律性、責任	より決定論的な相互因果関係
(4) 理論の目的、範囲、および適用	指図と禁止、抽象的、分析と批判	説明・予測、具体的かつ測定可能的、実際の行動に影響を及ぼす
(5) 理論の根拠、評価	経営実践に対する反省、 道徳的判断の合理的批判	経営実践の経験的研究、 経営問題を説明し予測し解決する能力

図表 1　経営倫理学研究への規範的ならびに経験的アプローチ

（出所）Trevino, L. K., and G. R. Weaver, "Business ETHICS/BUSINESS ethics: One Field or Two?," *Business Ethics Quarterly*, Vol.4, No.2, 1994, p.115.

さて、これまで概観してきた経営倫理学の２つのアプローチの間に横たわる分離は、これまで数世紀にわたり哲学と科学の間に存在してきた１つの主要な問題[3]、すなわち「事実／価値の二分法」のアナロジーであるとも言えよう。だとすれば、ここで、この問題に取り組んだ従来の思想家の見解に着目することは、経営倫理学におけるこれら異なる２つのアプローチを関連づけ、経営学と倫理学がクロス・オーバーした真の学際的な研究領野として斯学を展開するうえで、あながち無意味な作業であるとは言えまい。だが果たして、そのヒントになりうる思想はあるのだろうか。幸い、今世紀に入り、ヒラリー・パトナムがこの事実 - 価値二分法を主題に取り上げ、その問題を解く手掛かりをジョン・デューイの思想に求めている[4]。そこで、本稿でも彼に倣い、デューイの価値理論を拠り所にして、この問題に些少の考察を加えることにしたい。まずは、事実／価値の二分法をめぐるこれまでの代表的な諸見解をごく簡単に振り返ることから始めよう。

Synthesis of Normative Philosophy and Empirical Social Science," *Business Ethics Quarterly*, Vol.4, No.2, 1994, pp.145-155.)。さらに、トーマス・ドナルドソン＝トーマス・ダンフィーは、究極的な価値判断をするときに経験的研究と規範的研究の両方を必要とする共生的調和状態に「べき」と「ある」とをつかせようとする（Donaldson, T., and T. W. Dunfee, "Toward a Unified Conception of Business Ethics: Integrative Social Contracts Theory," *Academy of Management Review*, Vol.19, No.2, p.254.)。

[3] この問題の別の表現様式として、客観的アプローチと主観的アプローチとの差異、「ある」と「べき」との差異、あるいは記述的言明と指図的言明との差異というようにも表されてきた。

[4] Putnam, H., *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy*, Harvard University Press, 2002. 藤田晋吾・中村正利訳『事実／価値二分法の崩壊』法政大学出版局、2006 年。

Ⅱ　事実／価値の二分法：概観

伝統的には、価値と実在とは一元的に捉えられる傾向が強かった（例えば、プラトンの「善のイデア」の思想や「すべての存在は善である」とする中世スコラ説を想起されたい）。これに対して、価値と事実との基本的な差異を明確に指摘し、「存在」から「当為」、すなわち「ある（is）」から「べき（ought）」を推論することは論理的に不可能である、と主張したのがデビッド・ヒュームであった。パトナムは、事実／価値二分法の歴史の起点をここに求めている[5]。その後、倫理学においては、古典的功利主義者、ジョン・スチュアート・ミルが、「何かが望ましいことを示す証拠は、人々がそれを実際に望んでいるということしかない[6]」と考えた――この功利主義的着想は後年、倫理的価値言明が事実言明と同じく真理値をもつか否かを論議する「メタ倫理学」における自然主義の立場へと受け継がれることになる。このような、価値を経験的な事実言明や事実的存在から導き出そうとする試みに対して、それが「自然主義的誤謬（naturalistic fallacy）[7]」を犯している、と非難したのがジョージ・E. ムーアであった。

ムーアによると、善のような非自然的属性（倫理的概念）を快楽のような自然的属性（非倫理的概念）によって定義することは誤りである。すなわち、彼は、善をあらゆる自然的な対象や性質と同一視したり、それらによって定義可能だとしたりする立場を厳しく非難することで、善（倫理学）をすべての自然的なもの（自然主義）との結合から解放する必要がある、と考えたのである[8]。そして、ムーア自身は、善は1つの単純概念であり定義不可能（諸部分に分析不可能）であるとしたうえで、それは「直観（intuition）」という能力によってのみ把握できる性質である、と主張した――それは、後にメタ倫理学における直観主義の立場と位置づけられる。このように、ムーアは、善の自然主義的理解への批判を通して、存在と当為（事実と価値）との間には完全な分離があり、価値言明が事実言明に還元されえないことを明確に指摘したのである。

このムーアが主張した事実と価値の峻別は、その後アルフレッド・J. エイヤーによって新たな解釈が加えられることになった[9]。エイヤーによると、「良い」「悪い」「正しい」「正しくない」「忌わしい」といった価値表現は、感嘆や感情と同じ種類のものと見なされるので、事実命題の構成要素とはなりえない。メタ倫理学で情緒主義と位置づけられるこの彼の立場では、倫理的言明（価値言明）は、単なる感情の表白であるので、真偽のカテゴリーには入らないし、合理的な方法で検証することもできないのである。要するに、彼に従えば、有意味な命題とは、先天的命題と検証可能な経験的命題であって、いずれにも属さない命題は形而上学に属する無

---

[5] *Ibid.*, p.14.『同上訳書』15ページ。

[6] J. S. ミル著、伊原吉之助訳「功利主義論」関嘉彦責任編集『ベンサム　J. S. ミル〔世界の名著49〕』中央公論社、1979年、497ページ。

[7] Moore, G. E., *Principia Ethica*, Cambridge University Press, 1903, p.10. 泉谷周三郎・寺中平治・星野勉訳『倫理学原理』三和書籍、2010年、115ページ。

[8] 清水幾太郎『倫理学ノート（1972年）』講談社、2000年、47ページ。

[9] Ayer, A. J., *Language, Truth, and Logic*, Victor Gollancz, 1936. 吉田夏彦訳『言語・真理・論理』岩波書店、1955年。

意味（non-sense）なのである[10]。このようなエイヤーの主張は、倫理学が性質上、「非認知主義的（non-cognitive）」であること、つまり道徳的判断は事実についての認知ではなく真偽の区別が不可能であるので、倫理学は真の知識の地位をもたないという見解を支持する「論理実証主義」の核心となっていった。

パトナムによると、ヒュームに由来する事実／価値二分法は、この論理実証主義によって非常に影響力のある形態にまで到達した。そこでは、倫理的概念が詳細に検討されることなく、もっぱら事実的な本性だけが考慮された。その結果、倫理的言明（価値言明）は事実についての言明ではなく、単なる主観的感情の表現であるか変装した命令法であるかのいずれかだと見なされ、合理的議論の領域から排除されていった。要するに、パトナムの見立てでは、論理実証主義における事実／価値二分法は、実際には区別ではなく、「倫理学（価値哲学）は事実についてのものではない」というテーゼを表明したものであったのだ[11]。こうして、「事実」と「価値」との間には、「価値」が合理的な議論の領域から完全に排除されてしまうような仕方で線引きされる傾向が鮮明になったのである[12]。

もちろん、経営倫理学において経営が何を行うべきであるか（あるいは何を行うべきでないか）に関する規範的言明を主張したい者にとって、事実／価値二分法を「価値判断は事実的証明の及ばないものである」と結論づける主張は受け入れ難い。とはいえ、規範的言明の擁護者とて、このような経験主義者の主張に抗するには、「こうした規範的言明の妥当性は、いかにして確立されうるのか」、あるいは「それらは科学的テストでは簡単に却下されうる単なる見解や教条的主張ではない何ものかである、とどのようにして認められうるのか」といった問題に応えるのを避けるわけにはいかないであろう[13]。おそらく、その問題を解く鍵は、いみじくもパトナムが示唆したように、これまで経験主義者達や哲学内外の他の多くの人々が正当に評価してこなかった、「事実記述と価値づけとは絡み合い（*entangled*）うるし、またそうならざるをえないという点[14]」を解明していくことであろう。その際、1つの手掛かりになると考えられるのが、プラグマティズムの哲学者、ジョン・デューイの価値理論である。そこで、次節では、彼の所論を概観することを通して、この「事実と価値との絡み合い（the entanglement of fact and value）[15]」について考察することにしたい。

---

[10] 清水『前掲書』206ページ。

[11] Cf. Putnam, *op.cit.*, p.61. p.17. p.19.『前掲訳書』75ページ、20ページ、22 – 23ページ。したがって、論理実証主義にとって、認識的に有意味な判断とは、分析的判断（規約に基づいて真ないし偽）か総合的判断（経験的に検証・反証可能）のいずれかである

[12] その理由をパトナムは次のように述べている。「『それは価値判断だ』と述べ、『それは主観的好みの問題にすぎない』を意味した方が、ソクラテスがわれわれに教えたことを実行するよりも、すなわち、われわれが何者であるか、そしてわれわれの最も深い確信が何であるか、を吟味し、その確信を反省的吟味の徹底的テストにさらすことよりもはるかに楽だからだ」（Ibid., p.44.『前掲訳書』52ページ）。

[13] Cf. Rosenthal, S. B., and R. A. Buchholz, *Rethinking Business Ethics: A Pragmatic Approach*, Oxford University Press, 2000, p.37. 岩田 浩・石田秀雄・藤井一弘訳『経営倫理学の新構想――プラグマティズムからの提言』文眞堂、2001年、45ページ。

[14] Putnam, *op.cit.*, pp.26-27.『前掲訳書』31ページ。

[15] この表現はパトナムから借用した（*Ibid.*, p.28.『同上訳書』32ページ）。ちなみに、この主題との関連でデュー

Ⅲ 「事実／価値」をめぐるプラグマティックな見解
――デューイの価値理論を手掛かりにして――

その長い研究生活において、デューイは「価値」の問題について幾度となく言及してきたが、そのまとまった見解は最晩年（79歳）に著された『価値評価の理論[16]』に見られる。本書はもともと、オットー・ノイラートからの強い招請を受けて、ウィーン学団が推進する『統一科学百科全書』の第2巻第4号として上梓されたものであった。ただし、その内容は、後述するように、論理実証主義の立場とはかなり掛け離れたものであった。以下では、本書と同時代に著された『倫理学（1932年版）』を中心に、「価値」に関するデューイの見解に一瞥を加えることにしよう。

1. デューイの価値理論の基本――「価値づけ」と「価値評価」の関係

「すべての熟慮された、すべての計画された人間行為は、個人的にも集合的にも、到達すべき目的の価値や値打ちの評価によって、支配されないまでも影響されると思われる」がゆえに、「価値評価の問題は、人間の諸活動と人間の諸関係に関する科学の構成の問題と密接に関係する」、とデューイは指摘する[17]。ここで言われる人間行為とは端的には、具体的な環境（状況）との相互作用の中で生活する人間の目的的行為のことである。デューイによれば、価値の評価や判断は、この環境（状況）への適応過程において選択的になされ、その人間行為に何らかの影響を与えるのである。それでは、人間と環境との相互作用あるいは生命活動において捉えられるデューイの価値理論の本性とは、どのようなものなのであろうか。ここではまず、その基本概念である「価値評価（valuation）」と「価値づけ（valuing）」との関係を検討することから始めよう。

デューイは、「価値評価」と「価値づけ」とを区別して捉え、次のように述べている。「判断としての価値評価（それは判断される事物をその諸関係や諸意味の中に位置づけるときの思考を含む）と直接的・情緒的・実践的行為としての価値づけとの間には、注意されるべき差異がある。尊重（esteem）と見積もり（estimate）、重宝（prizing）と値踏み（appraising）との間にも差異がある。尊重することは、重んじ大切にし賞賛し満足に思うことである。見積もることは、知的な仕方で測定することである。一方は直接的・自発的であり、他方は反照的・反省的である。[18]」。こうして見ると、価値評価と価値づけとの間の区別は、知性が事物に対し

イについて、彼は次のように述べている。「『事実』と『価値』との関係についての私が本書で擁護しようとする観点は、ジョン・デューイがその長くて称賛に値する経歴のほとんど全部を通じて擁護した観点です。……彼の攻撃目標は、彼が事実／価値『二元論』と呼んだものだったのです」（*Ibid*., p.9.『同上訳書』10ページ）。

[16] Dewey, J., *Theory of Valuation* (1939), in Boydston, J. A. (ed.), *John Dewey: The Later Works*, Vol.13, Southern Illinois University Press, 1991, pp.189-251. 拙訳「ジョン・デューイ『価値づけの理論』」（上）『大阪産業大学論集（人文･社会科学編）』1号、2007年、87-112ページ。「ジョン･デューイ『価値づけの理論』」（下）『大阪産業大学論集（人文・社会科学編）』2号、2008年、161-187ページ。

[17] *Ibid*., p.192. p.193.

[18] Dewey, J., and J. H. Tufts, *Ethics, Revised Edition* (1932), in Boydston, J. A. (ed.), *John Dewey: The Later Works*, Vol.7, Southern Illinois University Press, 1989, p.264.

て介入するか否かにかかっていよう。すなわち、価値評価は思考と反省に裏づけられ、事物をその諸関係において観察し比較し見積もる（測定する）判断であるのに対して、価値づけは「評価される事物を他の諸事物との関係において考える」という知性の媒介なしの直接的・情緒的行為である、と一応このように識別することができよう。だが、デューイの価値論の１つの特徴は、両者を単に区別することにあるのではなく、このようにして区別された両者を連続性において捉えるところにある。以下、この点について簡単に触れておこう。

「直接的感受性の欠如を補いうるものは何もない」と考えるデューイにとって、「人と行為の直接的で主として非反省的な評価がなければ、それに続く思考のためのデータは欠如するか歪曲されうる[19]」。したがって、「人が熟慮するための誘因や材料をもつ以前に、対象の粗さや滑らかさの質を手で感じるように、行為の質を感じ（feel）なければならない[20]」。このように、人間の価値経験は、環境との相互作用において「対象や人を重んじるとか、それらに引きつけられるという意味での価値づけ（valuing）」がなければ始まらない。だが、価値づけは、あらゆる認識的要因を不要とはしない。なぜなら、そこでは、直接的な賞賛や尊重が対象の中に吸収されてしまい、「その対象の位置取りや効果や他の事物との関連性を考慮するといった点が欠如している[21]」からだ。したがって、直接的価値づけによって把握された対象は、「賞賛すべき対象であるか、真に重んじられるべきか、それを大切にすることを正当化する根拠をもつかといった価値評価（valuation）」を必要とするのである。そして、尊重や是認に値する対象として何らかの価値観念がこの価値評価によって決定または保証されることで、最初の直接的な態度としての価値づけは再構成されたり変容されたりしうる。デューイの言葉を借りれば、「行為に対する直接的で敏感な反応を伴う直接的価値づけは、熟慮的・反省的な価値評価の中にその補足と拡大を有するのである[22]」。こうして、人間は、「自発的態度から反省的・批判的態度へのこのような変化」を伴う価値経験を通して、成熟・成長していくのである[23]。このように、デューイは、人間の価値経験を価値づけ（情緒的なもの）と価値評価（知的なもの）との連続性または統合において捉えるのである。

では、彼は、自らの価値理論の展開の中で、価値と事実とをどのように関連づけて理解したのであろうか。次に、この点について考察しよう。

---

[19] *Ibid*., pp.268-269.
[20] *Ibid*., p.269.
[21] *Ibid*., pp.264-265.
[22] *Ibid*., p. 271.
[23] これに関連して、デューイは、簡単な例として、ある食べ物を生まれながらに好む場合と、われわれが経験から強制されて、その食べ物がわれわれにとって「良く」ない、健康的でないことを承認する場合との相違を示している。「子供は異常にキャンディが好きで大切にする場合がある。大人は、それが子供にとって善ではなく、子供を病気にするであろうことを教える。この場合、子供にとっての『善』とは、美味しいもの、直接的願望を満たすものを意味する。より経験を積んだ人の立場からの『善』は、ある目的に役立つもの、結果とある関係を有するものである。価値判断とは、これらの関係を探し、考慮に入れる行為につけられた名前である」（*Ibid*., p.265.）。

2. 価値探究としての価値理論

まず手始めに、前節で簡単に触れたエイヤーの主張、すなわち「倫理的言明（価値言明）は単なる感情表現であり検証不可能なので真偽のカテゴリー（事実命題の構成要素）には含まれない」という立場を念頭に置いて、デューイが記した興味深い一文を引用しよう。彼は、以下のように述べている。

「例えば、『火事だ！』とか『助けて！』と叫ぶ人の場合を取り上げてみよう。そこでは、観察しうる、そして命題に言明することのできるある緒結果を引き起こすために他者の行為に影響を与える意志があることは明らかである。その表現は、その観察されうる脈絡の中で考えると、複合的な性格を帯びた何かを語る。…〔その〕語られることとは、(1) 嫌な結果がもたらされうる状況が存在する、(2) その表現をする人はその状況に対処できない、そして (3) 他者の支援が得られた場合、改善された状況が期待される、ということである。これら3つのことはすべて、経験的証拠によってテストされうる。なぜなら、それらは観察されうる事柄に関わるからである[24]」。

この一文から読み取れるように、デューイは、絶叫的な価値表現を理論的な真偽の観点から実証的に捉えるのではなく、それを実践的な有機体的行動（人間と環境との相互作用）の観点から捉える。それゆえ、彼によれば、「助けて！」という価値表現は、これと結びついている他の諸条件との関連において意味のある「記号」ないしは「兆候」と見なされるのである。このように、デューイは、価値表現を問題解決に向けての１つの要求として捉える。ここでの問題とは、その状況において何が欠如しているか、何が心配事であるか、何が矛盾しているかということである。その意味で、価値表現は、これをいかにすれば解決しうるかという問題意識から表現された切実な要求であると考えられる。彼は言う。「〔価値表現を含む〕諸命題は、直接的には**現存している**状況に、また間接的には生み出すことが意図され欲せられるところの未来の状況に関わる。記された表現は、現在の状態から**未来の**状態への望まれた変化をもたらす中間項〔中間的命題〕として用いられる[25]」、と。こうして、デューイは、エイヤーによって無意味なものと断定された価値表現を公共的かつ観察可能な具体的脈絡に即して考慮すること

---

[24] *Dewey, Theory of Valuation*, p.201.〔　〕内は引用者による加筆。

[25] *Ibid.*, p.202.〔　〕内は引用者による加筆。デューイは続けて次のように述べている。「〔先に例示した〕支援を求める叫びは、その存在の脈絡に関して考えられるとき、叫び声が出されるのに関した状況が『悪い』のだということを、それほど多言を要することなく効果的に断言する。それは、排除されるという意味で『悪い』のであるが、その叫びがある反応を喚起するならば、より良い未来の状況が期待される。……〔このように〕脈絡が考慮されるとき、問題になってくることは、現存する状態に対して相対的に否定的な価値を付与する命題、ある未来の状態に対して比較的積極的な価値を付与する命題、およびある事態から別の事態への変化をもたらすであろう活動を喚起するよう意図された中間的命題である。かくして、そこには (1) 現存する状況への嫌悪と未来の可能的状況に対する魅力、および **(2) 目的としての魅力とそれを遂行する手段としての諸活動との間の詳述できテストもできる関係**、が含まれている」（*Ibid.*〔　〕内は引用者による加筆）。

で、それが自然的事象と同じように経験的に検証可能であり、それゆえ有意味である[26]、と主張するのである。

こうして見ると、デューイの価値理論の独創性は、パトナムも指摘しているように[27]、それがチャールズ・パースから受け継がれたプラグマティックな「探究（inquiry）」――不確定な状況を確定した状況に統制され方向づけられた仕方で変容させること[28]――の理論的枠組みの中で展開されている点にあると考えられる。そこで以下では、この価値探究の過程を簡単に辿りながら、デューイが価値と事実との関係をどのように捉えたのか、探ることにしよう。

「価値づけは何らかの問題、取り除かねばならない困難、改善されなければならない何らかの必要、欠乏、ないしは困窮、現状を変えることによって解決される何らかの傾向性の対立があるときにのみ生起する[29]」と言われるように、価値の探究は人間の現実的な生命活動の中から生起する問題状況（問題のある何か）を契機に始まる。そうした問題は、直接的に感受されるだけでなく、除去したり改善したり解決したりする必要のある事実として記述されうる。それを受けて、このような現存する問題や対立を改善または解決するために、見込みのある「**望ましい**（*desired*）」諸観念として「予見された目的（ends-in-view）」が形成されていく。もちろん、この形成過程では、さまざまな観察的・事実的データ（事実的証拠）に照らして、それらが採用された場合に起こりうる諸結果の予測、これら予想されうる諸結果の比較、さらにはそれらの内のどれが現存する問題の解決にとってより有効であるかを検討すること、等といった知性的・批判的な価値評価が加えられる。そして、このような「情緒的－**観念作用的**－運動（*affective-ideational-motor*）[30]」とも表現される価値評価によって、発見ないし見出された特定の望ましい解決案は、具体的に実行されることによって、その現実的妥当性が客観的に検証される。その結果、当初の問題状況が改善されたとき、それは「**望むに値する**（*desirable*）」観念、すなわち単に「**価値ありと見なされるもの**（the *valued*）」と対比されるところの「**価値を有するもの**（the *valuable*）」として規範的に受け入れられ、保証されうるものになる。逆に、好結果が得られない場合、それは失敗の原因を突き止める更なる探究へと導かれうる[31]。デュー

---

[26] もっとも、それは、表現を受け取る側の直接的感受性に依存しよう。例えば、国会周辺でなされるデモを「騒音」だと言い放つ某政治家には、その切実な叫び声は無意味なものと見なされよう。

[27] パトナムは次のように述べている。「もしデューイを倫理学者あるいはメタ倫理学者…として際立たせているものがあるとすれば、それは**探究一般にとって有効なことは価値の探究という特殊領域にとっても有効であるという見方**の重要性を彼が強調し、その見方を首尾一貫して適用したという点にある」（Putnam, *op.cit.*, p.104.『前掲訳書』131-132 ページ）。

[28] Dewey, J., *Logic: The Theory of Inquiry* (1938), in Boydston, J. A. (ed.), *John Dewey: The Later Works*, Vol.12, Southern Illinois University Press, 1991, p.108.

[29] Dewey, *Theory of Valuation*, p.220.

[30] *Ibid.*, p.218.

[31] Cf. *Ibid.* これに関して、パトナムは次のように述べている。「ジョン・デューイがずっと昔強調したように、倫理的主張が要求する客観性とは、われわれが倫理的生活を営み、倫理的反省をすることに先立って存在する、プラトン的その他の基礎によって与えられる種類のものではない。それは、われわれが実際に出くわす問題状況において提起される類の批判……に耐えうるという能力なのである」（Putnam, *op.cit.*, p.94.『前掲訳書』119 ページ）。

イは、価値探究のプロセスを大よそ以上のように把握することで、「価値評価は実際に存在するし、経験的観察が可能である。それゆえ、それに関する命題〔価値命題〕は経験的に検証可能である[32]」、と主張するのである。

もちろん、「人間は絶えず価値評価に携わる[33]」と考えるデューイにとって、ひとたび受け入れられた規範的価値も絶対的・究極的なものではない。それは、経験の連続性の中のある特定状況において妥当したものにすぎず、新たな状況においては必ずしも妥当するとは限らない。この点に関し、「過去と現行の価値評価の知識が新たな価値評価の道具となるように適応されなければならない[34]」と主張したデューイの言明は示唆的である。そこで彼は、過去になされた評価と現行の諸評価を調査・分析し、そこから有用なものを引き出し、それらを新たな価値評価のための材料として、その中に体系的に組み込むことを推奨するのである。「改善された価値評価（improved valuation）は、現行の価値評価（existing valuations）と相互に体系的な諸関係になりうる批判的な調査方法に従うことで、現行の価値評価から成長しなければならない[35]」。ここに、「可謬主義」に裏打ちされた価値評価の形成的・発展的特性が見て取れよう。変化する状況とともにさまざまな困難や対立が現われてくる限り、人間は絶えず価値評価や価値判断に携わらざるをえない。それゆえ、問題状況の改善に向けての価値探究は永続的なものなのである。

3. 事実／価値の二元論に抗して――デューイの価値理論の意義

これまでここでは、デューイの価値理論を価値探究の理論として捉え、その探究過程の輪郭を素描してきた。ところで、『価値評価の理論』の冒頭で、デューイは、価値の問題をめぐる当時（1930年代）の学術的状況について、「価値を単なる感情的形容詞と見なす立場」と「先験的に不可欠な標準化された理性的価値こそが芸術、科学、道徳の妥当性の拠り所となる原理であると主張する立場」とが、認識論における「観念論」と「実在論」、形而上学における「主観的」と「客観的」の議論から影響を受けながら、反目していると見て、それを問題視した[36]。おそらく、彼は、このような事実／価値二元論を念頭に置いて、当時隆盛を誇っていた論理実証主義によって合理的議論の領域から排除されてきた価値言明を復元させる方向で、自らの価値理論を練り上げていったに違いなかろう。このことは、先に一瞥した彼の価値探究の理論――それは価値づけと知的反省（「批判（criticism）」）との併用、ならびに価値評価と事実を「確

---

[32] *Ibid*., p.243.〔　〕内は引用者による加筆。なお、デューイによれば、価値命題は「生み出されるべき事物に関するもの」であるのに対して、事実命題は「生起したり既に存在していたりする事物や出来事に関するもの」である（*Ibid*., p.237.）。ここから推察するに、価値は人間の意志または知性によって実現される事柄（将来において達成されるべき目的）に関するものであり、事実は自然現象として生起した事柄に関するものであると言える。

[33] *Ibid*., p.243.

[34] Cf. *Ibid*.,pp.244-245.

[35] *Ibid*., p.245.

[36] Cf. *Ibid*., p.191. デューイは、この問題が大きく浮上した背景には、当時の科学技術の著しい発展があると考えていた、と推察される。

かめること（ascertaining）」との相互依存的活動として特徴づけられうる[37]――において、事実と価値とが（説明上、区別されてはいるが）相互に絡み合った形で展開されていることから窺い知ることができる。

思うに、事実／価値二元論についてデューイが抱いた確信は、次の一節に端的に込められていよう。「『事実の世界』と『価値の領域』との間に介在すると主張される分離は、価値化現象（valuation-phenomena）がその直接的源泉を生物学的な行動様式の内に有し、その具体的内容を文化的諸条件の影響に負うと見なされて初めて、人間の信仰（human beliefs）から消え失せるであろう[38]」。このような信念を基に築かれた、彼の探究的な価値理論は、確かに一見素朴ではあるが、行為的・実践的観点から事実／価値の関係を考察するうえで、看過することのできない１つの導きの糸になりうると考えられるのではなかろうか。

世間を悩ませている耐え難い緊張や不均衡の主要な源泉の１つが「現在の社会生活に存在する観念と情緒（特に科学的に保証された観念と実践を支配する無統制な情緒）との間の分裂、感情的なものと認識的なものとの間の分裂[39]」にあると考えるデューイにとって、単に形式的な論理学上の性格の違いから、事実と価値とを明確に切り離して、いずれか一方に軸足を置いて生きていくことなど認められない。そのような生き方は、人間の生命活動（環境との相互作用）に即して価値づけ－価値評価について思索する彼にしてみれば、「価値探究の道を塞ぐ行為」にほかあるまい。最後に、こうしたデューイの価値理論の核心をついた鶴見俊輔の一文を引用して、本節の総括としよう。

> 「生物としての進化の事実をまっすぐに見て、その進化の中からあらわれた価値を私たちが自分の生活を律する規範としてうけいれ、それも無条件の所与としてでなく、そのつど特定の状況の中で再考し採用する。この考え方はデューイの哲学の特色として、この晩年の著作〔『価値評価の理論』〕にはっきりあらわれている。事実判断と価値判断とが論理学上の性格からちがうという論理実証主義者の側からの指摘は、デューイにとって、それは、論理実証主義者がすでに洗練された命題の模型から出発するところから生じた、つくられた問題であるとされた。われわれの生そのものの必要とする思索はそのように運転されてはいないとデューイは主張する。事実と規範とがたがいに交渉し影響しあう道は、われわれが生きている現場では、とざされることはない[40]」。

Ⅳ　結言
――プラグマティックな方法的示唆――

では、翻って、経営倫理学の研究アプローチを二分する「規範的なもの」と「経験的なもの」との関係を考察するうえで、これまで概観してきたデューイの所論はどのような示唆を提供す

---

[37] Cf. Putnam, *op.cit.*, p.103. p.63.『前掲訳書』130 ページ。77 ページ。
[38] Dewey, *Theory of Valuation*, pp.248-249.
[39] *Ibid.*, p.249.
[40] 鶴見俊輔『先行者たち』筑摩書房、1991 年、161 ページ。〔　〕内は引用者による加筆。

るのであろうか。

まず言えることは、これら2つの研究アプローチを崩して、単一のエレガントに統一されたアプローチを新規に構想するのは不可能であり、またその必要もないということだ。このことは、デューイが事実／価値の二元論を問題視したとはいえ、決して両者を単一のものに統合しようとはしなかったことからも明らかである。すべてのことを一度にやることは、概念的泥沼に陥り、結果的に自滅的行為になりうるであろう。

だからといって、2つの研究アプローチをパラレルなまま放置しておくことを勧めるものでは断じてない。デューイの観点に立てば、経験的アプローチは価値評価を受けることでのみその十全なる意義を獲得することができ、同様に規範的アプローチもまた経験的に検証されることでのみその十全なる意義を獲得することができる、と認識することが要求されてこよう。パトリシア・ワーヘインも指摘するように、「純粋に経験的な方法論もなければ、純粋に規範的な方法論もないのである[41]」。また、このように、双方がその十全なる意義の獲得を他方のコンテクストの中に求め合うことは、単に両者が必要な時だけ協力し合う、純粋に便宜的な関係の意味での共生的関係を超越するものになるであろう。

では、なぜ経験的／規範的な2つのアプローチは本質的な意味で相互依存的な関係を保持しなければならないのであろうか。それは、われわれの複雑な世界に関する事実のほとんどが論争的であり変化しているうえ、その論争はそれがいかにして解決されるべきかといった価値をも反映しているからである。端的に言えば、われわれはもとより経営は、事実と価値とが複雑に絡み合った現実の世界の中に埋め込まれているからである。試しに、経営が直面している課題（環境・エネルギー問題、国際化、過労死、等）を幾つか取り上げてみれば、そのほとんどが事実と価値とが絡み合った概念、すなわち「記述的部分」と「評価的部分」とに単純に要素分解できないような概念（パトナムが言うところの「濃い倫理的概念（thick ethical terms）[42]」）からできていることに気づかされよう。こうした事態に対処するには、デューイが価値探究において指摘したように、鋭敏な直接的感受性を伴った事実認識、事実的証拠やデータに裏打ちされた規範的な価値形成、形成された規範的価値の経験的検証、を総合的に活用することが欠かせまい。要するに、問題状況を有意味に改善された状況へと変容していくには、経験的アプローチと規範的アプローチとを徹底的に絡み合わせていく以外に術がないのだ。デューイに即して考えれば、大よそこのような見通しが得られるであろう。

もっとも、このようなパースペクティヴに対して、そこで最終的に提示された価値命題は厳密かつ正確に記述することができないので、その客観的妥当性は乏しいのではないか、といったラディカルな経験主義者からの批判も当然予想されうる。このような批判に対して、ここではパトナムの意見に与して、「**客観性**を記述と等値することはもうやめるべきだ[43]」と応答し

---

[41] Werhane, P. H., “The Normative/Descriptive Distinction in Methodologies of Business Ethics,” *Business Ethics Quarterly*, Vol.4, No.2, 1994, p.179.

[42] Cf. Putnam, *op.cit.*, pp.62-63. pp.34-43.『前掲訳書』76-77ページ。39-52ページ。

[43] *Ibid.*, p.33.『同上訳書』38ページ。

たい。というのも、記述ではないけれども、合理的に制御され特定の機能と脈絡に相応しい規準によって支配される多くの種類の言明――「正しい／正しくない」、「真なる／偽なる」、「保証された／保証されていない」というような概念によく馴染む本物の言明――が日常的に見受けられるからだ[44]。否むしろ、実際の経営事象では、「価値判断」の真偽は、デューイも示唆したように、「保証された言明可能性／保証された否認可能性」のようなタームとして社会的に受容されるか否かでしか、ほとんど確認することができないのではなかろうか。その意味で、客観性を記述可能性と同等視することは、あまり現実的であるとは言い難い。

このように見てくると、デューイの価値理論は、経営倫理学の研究アプローチに存在する「経験的なもの」と「規範的なもの」とを有意味に関連づける１つの方法的示唆を提供するものと言えよう。それはまた、価値探究の学としての経営倫理学の可能性をも示唆してくれるかもしれない。思うに、プラグマティズム的（デューイ流）に言えば、経営倫理とは、経営がその実践的活動において「何が存在して然るべきものなのか（what ought to be）」を常に探究することを通して、経営のあり方やその存在理由を広く社会に披瀝またはアピールすることである、と捉えられうる。そのためには、事実認識と価値評価との間を絶えず往還しながら、経営にとって「何が問題なのか」を真摯に問い、「それにどう対処すべきか」をよく検討する、そして、その中から打ち立てられた「望ましい（desired）」価値を社会的実践の中で「望むに値する（desirable」」規範的価値へと鍛え上げていく、そのような永続的な価値探究の道を歩まなければなるまい[45]。ここに、経営倫理学の１つの研究アプローチとしてのプラグマティックなルートが垣間見られよう。主としてデューイによって暗示されたその道は、未だ探査され尽くされてはおらず、そこを歩むには、新たな重荷を背負わされるかもしれない[46]。このように、決して平坦な道程ではなさそうであるが、斯学の方法論に多少とも関心をもつ者にとっては、探訪してみる価値のあるルートだと言えるのではなかろうか。

---

[44] Cf. *Ibid*.『同上訳書』。

[45] ちなみに、注 32）でも触れたように、デューイによると、事実命題は過去と現在に関する事柄であり、価値命題は未来に関するものである。その意味では、デューイの価値探究には、過去に照らして現在を未来に向かわせるというニュアンスも含まれていると考えられる。

[46] 例えば、価値探究過程には直接的感受性の議論が含まれるゆえ、経営倫理学と美学との関係が１つの争点になりうるかもしれない。その点では、最近、Koehn, D., and D. Elm（eds.）, *Aesthetic and Business Ethics*, Springer, 2014. が上梓されたことは興味深い。ちなみに、そこに収められた８本の論文の内４本で、デューイの美学書が引用されている。なお、デューイの美的経験論については、拙稿「J. デューイの審美的経験論と経営倫理」『大阪産業大学論集（社会科学編）』111 号、1999 年、で若干検討したことがあるので、参照されたい。